

村野藤吾設計による「海軍将校倶楽部」の建設・移築経緯

正会員 ○平井直樹*1 同 石田潤一郎*2 同 笠原一人*3

9.建築歴史・意匠—2.日本近代建築史

村野藤吾, 海軍将校倶楽部, 鈴鹿海軍工廠, 志摩観光ホテル, 叡山ホテル

1. はじめに

本稿では、戦時下における村野藤吾の建築活動に関する研究の一環として、「海軍将校倶楽部」¹⁾を取り上げ、その建設と移築の経緯を明らかにする。

村野は、志摩観光ホテル創業 30 周年を記念して刊行された冊子に寄せた文章²⁾でこの作品に触れており、そこから、村野が海軍将校であった天野俊一から「叡山ホテル」のような建物を作ってほしいとの依頼を受けたこと、資材の獲得が困難であったが天野と交流のあった川喜田半泥子から松材の寄付を受けて実現したこと、戦後に解体されて「志摩観光ホテル」の元になったことなどがわかる。

その一方で、長谷川堯が村野のこの言説を引いたうえで、「わかりやすくいえば海軍の将校専用倶楽部の、木造大架構の建築空間が、敗戦直前の鈴鹿に完成した、というのだが、図面はおろか、建物の内外の写真1枚も村野の事務所に伝えられておらず、まさしくこれは、いわば“幻の村野作品”として、詳細が不明のまま今日に至っている」³⁾と述べているように、正式名称、敷地、建設経緯、建築的様態は不明であった。

しかし、筆者の調査により図面類が発見され、合わせて文献調査を進めた結果、建設と移築の経緯が明らかになったため、公表するものである。

2. 本研究の方法

本研究は以下の手順で行った。まず、『三重県議会決議録』を用いて、戦後に「志摩観光ホテル」に移築された「海軍将校倶楽部」が正式には「鈴鹿海軍工廠第一会議所」であったことを特定した。

そこで、鈴鹿海軍工廠の海軍側の建設主任が記した手記、施工者の社史から建設の経緯を明らかにし、関係者へのインタビューから事実の補強を行った。また、戦後に第2復員局によって作成された『引渡目録』とそこに含まれる略図により実現していることを確認し

た。そして、『三重県議会決議録』、『同決議録』に当時の雑誌記事、社史等を加えて「志摩観光ホテル」への移築の経緯を追った。

また、建築については、京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵の村野藤吾建築設計図面の中から、これまで未確認であったこの作品の計画案とみられる図面、施工者との打ち合わせ図面、移築解体時の図面を発見したので、これらを参照した。

3. 「鈴鹿海軍工廠第一会議所」の建設経緯

3-1. 鈴鹿海軍工廠の建設

鈴鹿海軍工廠の沿革については、鈴鹿海軍工廠の建設主任であった海軍大佐内田亮之輔が記した手記『鈴鹿市の生いたち』⁴⁾(以下、『生いたち』)によるところが大きい。後年の記述ではあるが、内田が鈴鹿に滞在した1942(昭和17)年5月～1943(昭和18)年12月という短期間の出来事を詳細に記述したもので、年月等についても信頼性が高いと考えられる。

「J 廠」と仮称された鈴鹿海軍工廠は、太平洋戦争下での軍備増強にともなって新たに建設された海軍工廠の一つで、1943(昭和18)年6月1日施行の「海軍工廠令中改正ノ件」(勅令第434号)で横須賀鎮守府所属の海軍工廠に加えられたものである。ここでは機銃部と火工部を中心として航空機に搭載する機関銃とその弾薬包の製造を行った。建設委員長は舞鶴海軍工廠造兵部長であった齋尾慶勝造兵少将が務めた。

1942(昭和17)年3月5日に海軍省で建設の決済がなされ、4月には建設が開始された。予算は3億円、従業員数は3万人、敷地面積は2150万m²の大規模な計画であったが、実際に完成・稼動したのは、本体面積360万m²、従業員1万人余りであった。この地方は軍施設の建設において地理的好条件を具えていたことから多数の軍施設が進出し、1942(昭和17)年12月1日にはこれらを基盤として鈴鹿市が成立した。

The Architectural History of the Officers' Open Mess Designed by Togo MURANO
HIRAI Naoki, ISHIDA Jun'ichiro and KASAHARA Kazuto

建設主任となった内田は、四日市に建設された第二燃料廠の施設を評価して横須賀海軍建築部の技術少佐天野俊一を技師に指名した。天野俊一（1909-2005）は1933（昭和8）年に東京工業大学建築学科を卒業、海軍省建築局を経て1937（昭和12）年に横須賀海軍建築部に入部し、鈴鹿、三重、大井、豊橋海軍航空隊、豊川、高茶屋、鈴鹿海軍工廠の工事主任を務めた⁵⁾。鈴鹿海軍工廠の仕事では、天野の下に建築の伊藤技手と土木の軍司技手がいた。施工は竹中工務店、間組、北川組（名古屋）、中島組（神戸）、銭高組が分担した。

3-2. 「鈴鹿海軍工廠第一会議所」の建設

「鈴鹿海軍工廠第一会議所」（以下、「第一会議所」）は、工廠本体の北側、平田町となる牧田村に計画された。敷地は、現在の近鉄平田駅から程近い鈴鹿市平田町2丁目14番付近にあたる場所で、当時は松林であった。平田町は工廠幹部のための官舎街として整備され、甲・乙・丙・丁合わせて83棟の官舎が建設され、135世帯が生活を営んだ⁶⁾。

その官舎街の中に、高等官（将校）用の「第一会議所」（図1）、判任官（下士官）用の「第二会議所」が用意され、建物は1943（昭和18）年春頃までにおおよそ出来上がったとされる。これらの会議所は接待用、出張者の宿泊用、会議用の他、さまざまな会合にも使用されるものであった。また、三重県下には他に多数の民間人が集まれるような集会所がないことを考慮して大きな設備にしたとされる。「第二会議所」は小規模ながら「第一会議所」と類似する平面構成を持ち、そのモデルとして建てられたとされ、施工を行った銭高組の社史によれば、どちらも村野の設計であったとされている。ただ、「第二会議所」については、その他の記述や村野に関係する図面の存在は確認できない。

『生いたち』では、これらは工廠本体と同様に天野俊一が担当したとされている。ここに村野の名前は記されていないが、建設にあたって天野が「建物の表現や内容は比叡山ホテルのようにしてもらいたい」⁷⁾と村野に設計を依頼したのである。村野は志摩観光ホテルについて述べたインタビューで、「私が軍の方に出むくと、なかにはお前は来なくてもよいから代りをよこせと敬遠する人もいましたが、その将校は趣味の立派な方で今だに感謝しています」と語っており、背景に天野との良好な関係があったことがわかる⁸⁾。村野

の設計による「三重海軍航空隊施設群」（1944）も天野が第1期工事主任を務めた施設であり、横須賀海軍の仕事が天野との関係によってもたらされていたことがうかがえる⁹⁾。佐野正一¹⁰⁾によれば、1943（昭和18）年には村野自らが加佐登の工事事務所にいた天野俊一を訪ねていたという¹¹⁾。

村野の記述では依頼された時期が「昭和十九年早春の頃某日」となっている¹²⁾が、これについては以下の点から村野の記憶違いもしくは誤植であると考えられる。①『生いたち』や村野の作品譜では1943（昭和18）年の建設となっていること、②京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する「第一会議所」の「打合図」（青図）には「J 廠工事 18.3.6 銭高組」と記された印があること、③1943（昭和18）年に、すでに村野は天野がいた工事事務所を訪ねていること、④村野事務所の所員であった近藤正志の記述¹³⁾では自らが入所した1943（昭和18）年11月頃までには海軍の仕事が終わっていたとされていること、の4点である。

「早春」という記述が正しいとすれば1943（昭和18）年早春と考えるのが妥当であろう。

「第一会議所」「第二会議所」を含む諸施設は銭高組の施工により実現に移された。現場の総主任は宇宿由記治が務め、土屋恵是、西村和家、木下正次郎、永岡静一、吉尾熊吉、安尾徳次、沖田兼一、宮崎嘉次郎、山下一夫、二階堂毅一、大森孝、古久保憲一郎、竹内芳太郎、高田弘、武田栄（庶務）らが工事に従事した¹⁴⁾。

軍用の建築は法的な統制の対象ではないとはいえ、戦況が厳しくなる中で建設に際しては資材の取得が困難となっていた。そのため、天野と縁のあった川喜田久太夫（川喜田半泥子）¹⁵⁾から松の大木25本の寄付を受けて賄われた。このころ川喜田久太夫から木造船

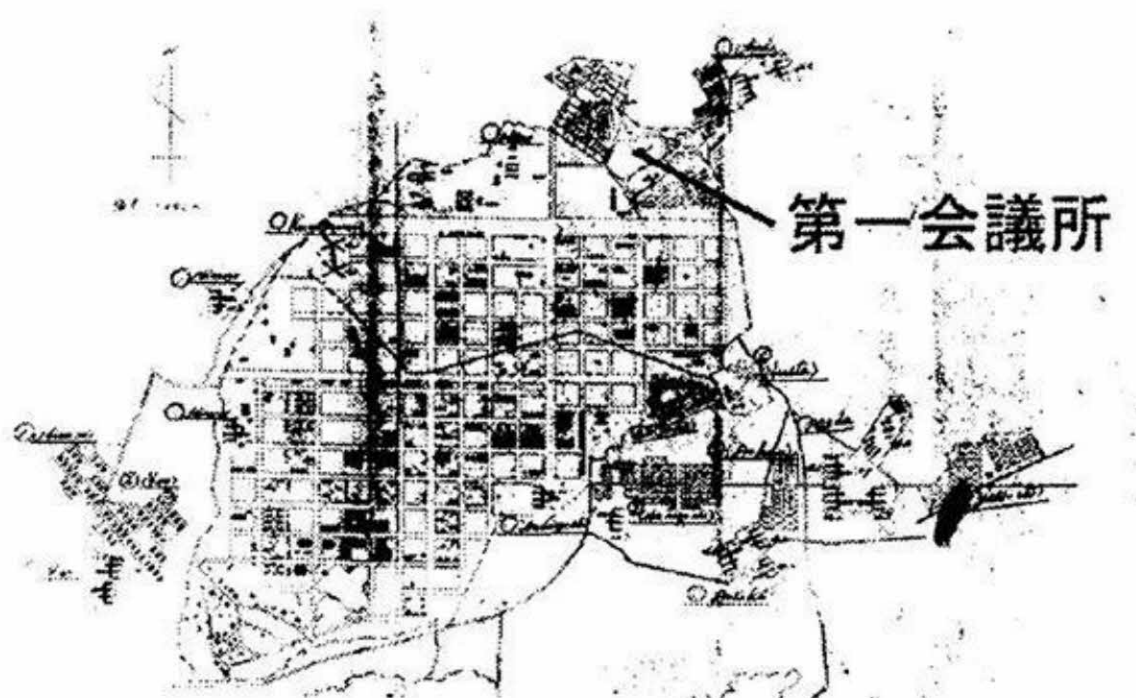


図1 鈴鹿海軍工廠（JACAR:C08011224100）

建造のために屋敷内の松の太木 100 本を寄贈する提案があり、それに便乗する形で寄贈を受けたという。それらの部材は荒削りのまま玄関、食堂、会議室、談話室等の大空間を形作る部材として用いられた。

また、1942（昭和 17）年暮れごろには、川喜田から藤水村垂水（現・津市）の千歳山にあった大江新太郎設計の「川喜田久太夫邸」の和洋館を寄贈したい旨の相談を受けていた¹⁶⁾。そこで、海省兵備局、艦政本部、施設本部等との折衝の末、「第一会議所」の附属屋（貴賓室）として移築されることとなった。1943（昭和 18）年夏ごろから移築に取り掛かり 11 月初めごろには大体が完了したという。（図 2）

なお、「海軍将校倶楽部」の建設には「叡山ホテル」を解体された主要な部材が再利用したとも言われてきたが、以下の点から実際に部材が用いられた可能性は低いと考えられる。①1943（昭和 18）年 9 月 10 日の「叡山ホテル」閉鎖以前の同年春頃までに「第一会議所」がおおよそ出来上がったとされること、②島津製作所寺田工場（1944 年 11 月開設）建設に際して、解体された「叡山ホテル」が寄宿舍として移築され、戦後は城南農工場の寄宿舍（城南寮）として使用されたこと¹⁷⁾、③「第一会議所」と「叡山ホテル」は建築の形態が一致しないこと、の 3 点である。

4. 「志摩観光ホテル」への移築

終戦後、市臨時復興対策本部は、「第一会議所」を工廠の転用工場街へ来訪する者の宿泊施設として転用する方針を決定し、来賓館としてしばらく利用された¹⁸⁾。その後、前述したように、賢島に移築されて「志摩観光ホテル」として再生されることになる。それ以前にも山口銀行や川喜田久太夫の肝いりで、津市に移築して観光ホテルとして使用する計画があったものの結局取りやめになったとされる¹⁹⁾。

1949（昭和 24）年 2 月 23 日、昭和 24 年度三重県定例議会において、青木理知事は賢島に国際観光ホテルを建設する計画を明らかにした。ここで青木は「鈴

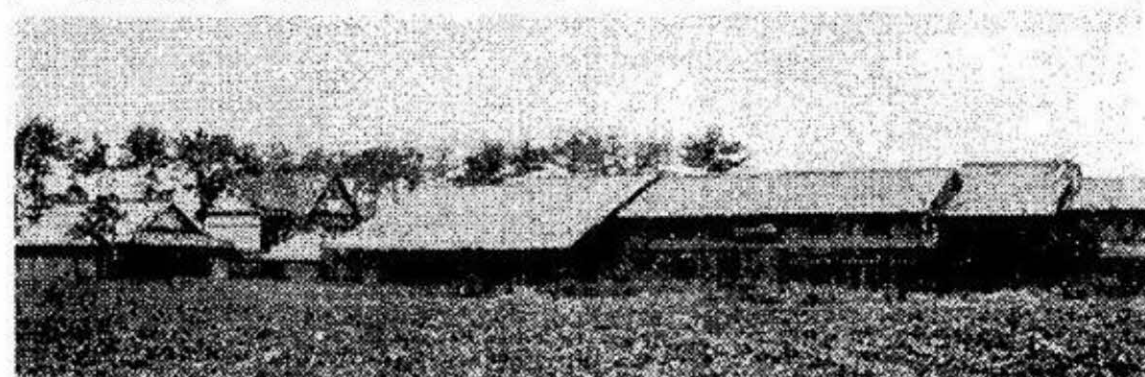


図 2 鈴鹿海軍工廠第一会議所（左は附属屋）
（前掲『鈴鹿市の生いたち』）

鹿市にあります遊休施設を賢島に移設いたしまして、全国でも異色のある内容を持つ誇るべきホテルを建設いたしたいと考えております」と述べており、この時点で遊休施設つまり「第一会議所」の移築を前提として計画を進めていたことがわかる²⁰⁾。

1949（昭和 24）年 6 月 24 日、国際観光ホテル建設に関して、現物出資 570 万円と県税 430 万円の計 1000 万円を計上した予算案が提示され、7 月 29 日に正式に出資することを決定。それに続いて、9 月 29 日に旧「第一会議所」を 3,042,118 円で買収し、それと同時に志摩観光ホテル株式会社へ売却した²¹⁾。1950（昭和 25）年の志摩観光ホテル株式会社設立に際して、三重県（1000 万円）、近鉄（1500 万円）、三重交通（500 万円）が出資し、残りは借入金によって賄われた。

建設地は鳥羽か賢島のどちらかに絞られ、賢島に決まったあとも実現した場所の他に近鉄が後に真珠研究所に提供した土地が候補としてあった。建築の企画設計・監督は近畿日本鉄道が担当し、土木部建築課長であった竹内孝が現場管理に当たった。施工は大林組が行い、黒川正三郎、石井清らが担当した²²⁾。

「志摩観光ホテル」へは、「第一会議所」の食堂を含む公室部分のみが移築された。敷地の高低差を利用した地階部分と客室部分は RC 造で新築された。公室部分の移築にあたっては、屋根の勾配が 4 寸から 4 寸 5 分に変更された他、2 階和室の用途変更、2 階の一部に張出を作ったり、化粧を変えたりという変更されたものの旧建物の意匠や仕上げを生かす形で建設された²³⁾。移築部分は修復を経て、「志摩観光ホテル クラシック」の一部として現在まで引き継がれている（図 3）。

個室部分は粗雑で天井高が低く、木材の狂いも大きかったことなどから従業員宿舎として賢島駅前に移築改造することになったとされるが詳細は不明である。また、かつての「川喜田久太夫邸」部分は 1950（昭和 25）年に鈴鹿市江島町に移築され、前年に設立された鈴鹿電気通信学園の宿泊施設「鈴鹿寮」となった²⁴⁾。



図 3 志摩観光ホテル（左側が移築された部分）
（多比良敏雄撮影による写真の一部分）

5. おわりに

村野藤吾設計による「海軍将校倶楽部」は、1943（昭和18）年に横須賀海軍建築部によって建設された「鈴鹿海軍工廠第一会議所」であったことが判明した。鈴鹿海軍工廠の建設主任を務めた内田亮之輔の下でその設計にあたった天野俊一が、村野に「第一会議所」の設計を依頼し、村野と天野の設計、銭高組の施工によって実現した。戦後は来賓館として使用された後、1949（昭和24）年に三重県を通して共同出資による志摩観光ホテルへ売却され、村野の設計、近畿日本鉄道の企画設計・監督、大林組の施工で移築された。

今後、設計図面や施工図面を用いて建築的様態を明らかにすることで、戦時下における村野の建築活動のあり方を知ることができると思う。

謝辞

安井建築設計事務所の佐野正一氏、和風建築社の吉田龍彦氏、島津製作所創業記念資料館の川勝美早子氏、銭高組の山塚秀一氏、大林組の荒田智康氏、タイラ・ホートの多比良誠氏、三重県生活・文化部文化振興室県史編さんグループの吉村利男氏、瀧川和也氏、亀山西小学校の岩脇彰氏、京都工芸繊維大学の竹内次男名誉教授にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) この作品には、「航空隊の将校集会所」「海軍集会所」「海軍療養所」など様々な呼称が用いられてきたが、本稿では戦後に刊行された村野藤吾の作品譜で共通して用いられてきた作品名称である「海軍将校倶楽部」を用いた。
- 2) 村野藤吾著、神子久忠編『村野藤吾著作集全一巻』（鹿島出版会、2008年）所収「志摩観光ホテル 創建の頃、前後」。初出は村野藤吾「創建の頃、前後」『浜木綿』（志摩観光ホテル、1979）。
- 3) 長谷川堯「いつまでも住んでいたい」ホテルの出現『村野藤吾のデザイン・エッセンス5 飾の躍動 ホテル・豪華客船』（建築資料研究社、2000）。
- 4) 内田亮之輔『鈴鹿市の生いたち』（鈴鹿市役所、1975）。
- 5) 「海軍施設系技術官の記録」刊行委員会『海軍施設系技術官の記録』（1972）。
- 6) 引渡目録「鈴鹿工廠（5）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C08011224100（第9画像目）、「「阪復」津 鈴鹿工廠 第2復員局（①—引渡目録—224）」（防衛省防衛研究所）。
- 7) 前掲「創建の頃、前後」。
- 8) 村野藤吾・田中一・鈴木博之・藤森照信対談「村野藤吾在野に生きる」『田中一对談集 建築縦走』1985による。また、村野藤吾、長谷川堯対談「現在に生きる」『建築をめぐる回想と思索』（新建築社、1976）では、「その人はな

かなか、趣味もお茶とか香などもやるぐらいのいい建築家ですが…」と述べている。

9) 拙稿「村野藤吾設計の三重海軍航空隊施設群について」『村野藤吾研究』、村野藤吾の設計研究会、2010）。

10) 佐野正一（1921-）は1942年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業。青島教育終了後に横須賀鎮守府付きとなり加佐登工事事務所に配属された。1943年に第四施設部に転じてマーシャル群島方面の飛行場建設に従事した。戦後は鉄道省を経て、1955年に安井建築設計事務所に入所、代表取締役社長、代表取締役会長を経て、現在は相談役。「宝塚ゴルフクラブ」（1959）は村野との共同設計による作品。

11) 安井建築設計事務所大阪事務所における佐野正一氏へのインタビュー（実施日：2009年9月7日、聞き手：平井直樹、石田潤一郎、笠原一人）による。加佐登の工事事務所で設計に携わっていた佐野氏は天野を訪ねて同所を訪れた村野に出会い、会話を交わしたという。

12) 前掲「創建の頃、前後」。

13) 近藤正志「村野先生の仕事と共に歩む」『村野藤吾のデザイン・エッセンス7』（建築資料研究社、2001）。

14) 銭高組社史編纂委員会『銭高組社史』（銭高組、1972）。

15) ここでいう川喜田久太夫とは伊勢商人川喜田家の16代久太夫（1878-1963）を指す。百五銀行頭取などを務めた実業家で、陶芸家・川喜多半泥子としても知られている。

16) 前掲『鈴鹿市の生いたち』によれば、「川喜田久太夫邸」は皇族が三重県に滞在する際に宿泊する御殿として1914（大正3）年に建てたものであるが、戦時下で物資や人手もなくお宿を命じられても困るとして寄贈されることになったという。また、菅原洋一「旧川喜田久太夫邸の建築について」（『日本建築学会学術講演梗概集』F-2、pp.753-754、1985）によれば、移築時に会議所との取り合いのため和洋館の位置が変更されたという。

17) 杉浦喜代一「東部丘陵開発前史—城南農工場と人々の生活—」（『和訶羅河—緑・教育・文化財—』Vol.3、緑と教育と文化財を守る会、1983）を元に島津製作所の社内資料、京都府の行政文書を加えて検討した結果、現地に残されたRC造の地階部分を除いて概ね移築されたものと判断した。長谷川堯『村野藤吾の建築 昭和・戦前』（鹿島出版会、2011年）では、島津製作所寺田工場への移築を認めた上で、「叡山ホテル」の化粧材が「海軍将校倶楽部」に再利用された可能性に言及されている。

18) 『20年のあゆみ』（鈴鹿市役所、1962）。

19) 前掲『鈴鹿市の生いたち』。

20) 『昭和24年三重県議会定例会臨時会会議録』。

21) 1949（昭和24年）9月29日議決「県有財産の取得並びに処分について」『昭和24年9月三重県定例議会決議録』。

22) 黒川正三郎「離れ島のホテル（志摩観光ホテル）」『村野先生と私』（村野、森建築事務所、1986）による。

23) 竹内孝「志摩観光ホテルの企画と設備」『建築と社会』第32巻第7号（日本建築協会、1951）。

24) 前掲「旧川喜田久太夫邸の建築について」によれば、移築の際に再度、和洋館の配置が変更された。その後、「鈴鹿荘」は1985（昭和60）年に解体された。

*1 京都工芸繊維大学大学院・工修 Graduate School of Kyoto Institute of Technology, M. Eng.

*2 京都工芸繊維大学大学院教授・工博 Prof., Kyoto Institute of Technology, Ph. D.

*3 京都工芸繊維大学大学院助教・博士（学術） Assistant Prof., Kyoto Institute of Technology, Ph. D.